

P01-3 限局性学習症を理解する：支援に活かす基本知識と実践的アプローチ 藤岡 徹 先生への質問（LIVE配信時のQ&Aリストです。オンデマンド配信視聴の方の質問は受け付けておりません。）	
Q	学習障害のアセスメントで使用されている検査は何を使用されていますか。また、WISCの結果とどのように関連づけて見立てをすればよいか教えていただけたらとありがたいです。
A	まずWISCに関しては、一般的な知的水準を見るというところでアセスメントで使います。いろんな要因で読み書きの困難が起きますので、その要因がどこから来るのかということ特定するために、例えば処理速度であれば、比較的シンプルな課題をすばやく解くということにもなります。やっぱりそこがゆっくりにどうしても読み書きゆっくりになったりしますので、そういうところも見ます。ワーキングメモリーも学習において非常に重要なポイントになってきます。そういうところも考慮しながら、稲垣先生が標準化された課題と、算数においては熊谷恵子先生が作成された課題を主に使っています。そこで見られる算数障害の特徴以外にも先ほど言った、処理速度とかワーキングメモリーとか、あと一般的な知的水準とかっていうものも見ながら、総合的にこの苦手さっていうものがどこから来るのかっていうのは見えています。あと語彙なども、支援していくにあたって非常に重要なのでそこら辺の指標もWISCから情報を得たりしています。視空間に苦手さがあるお子さんに関してはやはり、視空間のところで得点が入るといふようなこともありますので、もちろんそれを測定する検査も行いますけれども、WISCの方でもそれに関する指標が落ちてないかどうか確認して、整合性があったらやはりそこに苦手さがあるなというように裏付けとして使用をしています。算数障害に関しても、頭頂葉に関連する視空間の能力は数を扱う際に非常に重要な能力になりますので、そのところも落ちるお子さんはいるかなと、個人的な感覚としては持っています。
Q	初歩的な質問で恐縮ですが、就学前の言葉遊びや語彙、生活の中の数概念に触れる機会、協調運動（身体を使った遊び等）を経験する機会を確保することで、特に境界域の子の学習のつまずきは予防・軽減できるという考え方はありますか？
A	まず、学習を読み書き算数に限ることにします。とても重要な考えかと思えます。このような経験を通して読み書き計算の概念を獲得していきますので、幼児期においても同じように適応できるかと思えます。ただし、特別な教育的ニーズのあるお子さんは「みんなと同じようになる」といふようなことは目的としないので、その子の興味関心に沿って、その子のペースで、その子に必要な事柄を獲得してもらおうと思えます。
Q	先ほどの質問に追加で、SNSなどの普及によるこのような経験不足がLD傾向の児を増やしているということはあるでしょうか。いくつもすみません。
A	前の質問の続きと言うことで、未就学のお子さんを想定して回答します。経験はとても重要な要因にはなりますが、読み書き算数にはいろいろな要因が複雑に絡まりますので、早合点するのは危険だと思えます。もし、明らかに、複数の支援者から見ても改善が好ましい環境にいるという場合には、まずは、なぜそのような状況になっているのか、ということを考えるのが良いかと思えます。それを踏まえたうえで、その状況に理解を示し、自分ができるところを最大限するというところになるかと思えます。
Q	わかりやすいご講演ありがとうございました。算数障害についての質問です。私は日常生活に必要な算数能力の目安として、小学4年生と伝えています。先生の算数障害のご指導における目標を教えてください。
A	ご指摘の通り、どこまでするかは、本当に迷うところなんです。保護者の方に聞くと、4年生くらいから宿題が教えるのが難しくなるので、4年生の知識まであれば日常生活は困らない、と聞くことはあります。ですが、大学などで発達支援をする場合は、指導目標は、その子に応じて決めます。「ここまでは」といふような基準があると、「ここまでは、絶対にしなくて」と思ってしまう、無理を強いる指導になってしまいますので。大学などで発達支援をする場合は、数に親しむ、目の前の事象を数学的概念で解決できる（専門用語で説明するというわけではなく、例えば、割り勘ができる）など、つまり、日常生活の事象を計算できるようになるというところを目的にします。もちろん、「筆算ができるようになりたい」と子ども自身が言っている場合は、それを教えることもしています。
Q	算数障害を伴うSLDをわかりやすく教えていただける機会は少ないのでとてもありがたいです。医師が算数障害と診断した子どもに対して、特に中学校の定期試験での合理的配慮をどのようにお願いしたいのでしょうか。数の表、九九の表、電卓などの持ち込みは可能でしょうか
A	小学生ですが、数の表や九九表に関しては、時間をかければ自分で作れるので、わざわざ時間をかけて作る必要はないということで、テスト時の持ち込みも認められたケースがあります。電卓に関しては、高校入試において、全ての問題で使用するのはなく（ここがポイントかと思えます）、計算そのものよりも数学的推理の力を測定する問題（≒文章題）において思考する時間を確保するために使用を認められた例があるようです。これらのことを参考にさせていただくといふのではないかと思います（許可されるかどうかは別ですが）。算数SLDの合理的配慮も知見が蓄積されていきていますので、だんだんと広がっていくと思えます。
Q	都内で開業しております小児科医です。私の息子が1年生から不登校になり、LDが発覚しました。小学校1、2年生は音読、漢字が多く本人がとても苦痛だったようです。普通学級でも対応してもらえず、地域の学校は支援級は知的障害の子が主流なため本人が教育を受ける場所が得られません。みなさんどういったところでお勉強の機会を得ているのでしょうか。IQは130台と高めです。精神科の先生からはIQが高めなので、いずれ自分で獲得していくと言われて親としては非常に困っております。福井などではどういったところで教育を受けるところがあるのか教えていただきたいです。
A	福井でも、状況によって対応が様々ではありませんので、一般論としてお伝えさせていただきます。やりやすい方法を探したり代替手段（ICT機器）の練習などについては、高頻度に行うことができるかと、学校で対応してもらうことがまず最初に考えるところかと思えます。制度的には、通級になるかと思えます。そのほかの選択肢としては、放課後等デイサービス、（私のような特別支援を専門にする教員に）大学の教育相談などがあるかと思えます。
Q	すばらしいご講演をありがとうございました。福井県の教育委員会・学校で、入学後低学年に読み書きスクリーニングは実施されていますか？されていれば、その効果、未実施であれば、何が妨げているのか、教えてください。
A	県や市単位では実施されていないです（おそらく）。学校単位では実施しているかもしれませんが、何が妨げているかと言うと、断言は難しいですが、（MIMなどの方法が）知られていないということ、導入やその後の対応への負担感、などはあるかもしれません（あくまでも推測です）。
Q	算数のスクリーニングも併せてお願いします。
A	算数のスクリーニングも、上と同じような状況かと思えます。
Q	保護者の、特に父親の理解が乏しく、「それで、どうすれば読めるようになりますか？」と聞かれることが多いです。説明に際し、わかりやすく伝える資料がありましたらご紹介いただけたらとありがたいです。
A	親御さんがどこで引っかかっているのかで変わってくるかと思えますので、なかなか、難しいところですね。すみません、すぐに資料が思い浮かばず。。。代替機器などを使いながら日常生活を過ごしているLDのある大人の方の自伝などが良いかもしれませんね。
Q	読み書き、算数不全のアセスメントについてテストバッテリーのヒントをいただきたいです。
A	読み書きについては、スクリーニングには、STRAW-R、特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドラインを使っています。精査には、音韻の検査（ELC音読・音韻処理能力簡易スクリーニング検査など）、レイの複雑図形、URAWS、WAVESなどを用います。算数については、特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン、通常学級で役立つ算数障害の理解と指導法の課題を使っています。上のツールが絶対とは思っていませんが、今回お話しした内容を網羅して、支援にもつなげやすいと思っています。

Q	藤岡先生に質問いたします。通常の小学校に特別支援学校の判定が下りた児が入学してきています。低学年の間は大きな差はなかったのですが、これから4年になるにあたっては学力差はかなり開いていくと思われます。現時点でもその児童は3から4歳時並みの知的障害があり、道徳や社会、理科などに全く理解ができていない状態です。数の計算もおはじきを使ったりして足し算や引き算をしています。しかし、保護者は教育熱心で普通のレベルに押し上げたいと望まれています。このような場合、小学校高学年に向けてどこに目標を置いていくとよいのか。また授業の在り方についても教えていただけると嬉しいです。
A	お子さんを見ていないので、具体的にはお話しできず、一般的なこととなりますが、ご質問を読んで、きっと親御さんはお子さんのことを強く大切に思っている方なのだな、と思いました。そして、親御さんが不安に思っていることは何だろうとも思います。お子さんのことを思っているところは共通するところだと思いますので、そこを軸に考えていくとよいと思います。保護者と学校（担任、特科、管理職などみんな）だけでなく、医療や福祉など、みんなで支援会議を行って、目標を共有できるとよいと思います。付け加えにはなってしまいますが、授業については、本人の興味関心に沿って、大人になった時に必要なことを楽しく学べるのが、重要なのではないかと思います。
Q	藤岡先生、貴重なお話しありがとうございました。私はSLDはあまり診ていなかったのですが（もっぱらASD,ADHDなど）先日、年長女兒で「友達に手紙を書けるのに文字が読めない」を主訴に來られた症例がありました。結果的には文章は読めるようになってSLDは否定的と考えられたのですが、書く方が読む方より上位機能だと思っておりましたので、「書けるけど読めないことはあるのだろうか？」と随分悩みました。読み書き障害を日本人の英語学習時の難しさ程度にしか理解が及んでいませんでした。今日の先生の話でSLDの子供達の文字の認識障害は定型発達のつまずきではない、と思い知らされました。彼らがどのように文字を理解し、また理解できないでいるのか、きちんと診るべきだったと思っております。どうも有り難うございました。
A	コメント、ありがとうございました。読み書きや計算が、できてしまう人にとっては、苦も無くできてしまうので、その大変さがなかなか理解できないところもあります。私も、実際そうでした。そのように言うだけで、うれしい限りです。そして、おっしゃるように、「書字に困難が無いけれども、読字に困難がある」ということは、あまり聞きませんし、獲得の段階的にも自然ではないかと思ひます。そのような症例も経験したことはありますが、生活環境も含めて様々な要因が重なって起きていたと思われるお子さんでした。未就学のお子さんの書きだと、定型文だと書けるけど、絵本などの初めて見た文章をスムーズに読むのは難しい、ということもあるかもしれません。
Q	学習障害と診断された子は一体どこで指導を受けたいのでしょうか。
A	基本的には、必要があれば通級などの制度を活用していくことが大切だと思います。学習面での力というのは、やはり学校で日々直面することが多いため、学校の中で合理的配慮を受けることが重要になります。また、先ほどお話ししたような支援やトレーニングについても、可能であれば学校で実施できると良いですし、通級などを利用して行えたとさらに望ましいと考えています。どうしても、医療機関や福祉施設の場合は、制度上の制限もあって、通級制度もそうなのですが、1か月に1回、もしくは2週間に1回といった低頻度でしか関われないことが多いです。これが大きな制約になっていると感じています。そのため、ある程度の高い頻度で支援や練習を実施していくことを考えると、やはり「学校」という場が非常に重要なポイントになってくるのではないかと考えています。